琵琶機関紙
京絃
第三一六号　京絃社

建武の中興と吉野五十七年（五）

ばくすい

足利高氏が大軍を率いて九州から攻め上った時、楠木正成は一応賊兵を京都へ入れた上で四方より包囲して討とうという戦略を提案したが、朝廷では之を採用されず、京へ入れぬよう防戦せよと命じた。正成はやむを得ず兵庫に向った。〝太平記〟は―

正成是れを最後の合戦と思ひければ、嫡子正行が今年十一歳にて供したりけるを、思ふ様ありとて、桜井の宿より河内へ返し遣（つかわ）すとて庭訓（ていきん）を残しけるは、獅子子を産んで三日を経る時、数千丈の石壁より是れを擲（な）ぐ、其の子獅子の気分あれば、教へざるに中より跳ね返りて死することを得ずといへり。況んや汝すでに十歳にあまりぬ、一言耳に留まらば我が教誡に違ふことなかれ。この度の合戦天下の安否と思ふ間、今生にて汝が顔を見んことは是れを限りと思ふなり。正成既に討死すと聞きなば、天下は必ず将軍（高氏）の代になりぬと心得べし。然りと雖も一旦の身命を助からんために、多年の忠烈を失ひて降人に出づる事あるべからず、一族若党の一人も死に残ってあらん程は、金剛山のほとりに引籠って、敵寄せ来らば命を養由（よういう）が矢先きに懸けて、義を紀信が忠に比すべし。これぞ汝が第一の孝行ならんずると、泣く泣く申し含めて各東西へ別にけり。

是れが楠木正成の、その子正行に与えた最後の教訓で、その数日後湊川で奮戦し力尽きて弟正季と差しちがえて自決したのであるが、〝太平記〟は次ぎのように述べている。

そもそも元弘よりこのかた、かたじけなくも此の君に頼まれ参らせて、忠を致し功に誇る者幾千万ぞや。然れども此の乱又出で来て後、仁を知らぬ者は朝恩を捨てて敵に属し、勇無き者は苟くも死を免れんとて刑戮（けいりく）にあひ、智無き者は時の変を弁ぜずして道に違ふ事のみ有りしに、智仁勇の三徳を兼ねて死を善道に守るは、古へより今に至る迄正成程の者は未だ無かりつるに、兄弟共に自害しけるこそ聖主再び国を失ひて、逆臣横しまに威を振ふべき、その前表のしるしなれ。

太平記は誰が作ったものか著者は明らかでないが、足利勢力の強い時に当って厳しく之を逆臣ときめつけ、自決して果てた楠木正成に対して絶讃の辞を惜しまなかったのは、正邪の判断の正しいことと、堂々と之を発表して恐れなかった勇気との偉大な歴史家であったとすべきであろう。

桜井の駅で父正成の遺訓を受けた時、正行は十一歳であった。父の教えの通りそれより郷里に帰って力を養った。この楠木一門の現存する限り足利は気易く吉野を攻める訳には行かない。

正平二年九月、細川顕氏が三千余騎を率いて南下して来た。正行この時二十二歳、七百騎の兵を以て之を破った。藤井寺の戦というのがこれで、その年の暮れ山名時氏、細川顕氏が六千余騎を以て天王寺に迫った。正行は五百騎の手勢でこれを迎えて撃破した、安倍野の合戦である。この時逃げる賊兵が慌てて渡辺の橋から落ち、川に流れる者が多かったのを正行は救い上げて衣服を与え、身を温めて四、五日療養させ親切に送り還したので、その徳に感じて正行の家来となって恩返しをしたいと願い出で、四條畷の合戦に正行と一

ラヂオ琵琶放送

○…八月二十八日㈭午後三時十分NHK・FM、「川中島」押川旭葉女史。

○…八月三十一日午後六時十分NHK第一、（録音）「壇の浦」故田中旭嶺女史、「竜の口」故榎本芝水氏。

訂正

○…八月号七頁柴田旭堂女史の「旭会大師範」は「旭会総師範」の誤植。

○…九月号八頁三浦蓮水女史転居「西宮市羽衣町七番一九号」は「七番二九号」の誤植。

予告

○…各流琵琶演奏大会　十月五日㈰午前十一時名古屋市大須中小企業福祉会館六階ホール。錦心流名古屋秋声会長阿部秋子女史主催。京都牧秋静氏の「五條橋」を始め名古屋の会員の独奏、合奏十八曲の外名古屋丹野鯱水、奥村慧水、金沢村田知水、富山田中愛水、福井岸本港水、西川磯水、神戸田中歓水、京都馬場鴨水、平井春嶺、梅原旭濤、植村寞水各氏賛助出演。会主阿部女史は「須磨の浦風」、東京本部会長前田秋声氏は「琵琶行」を演奏。

○…錦心流琵琶昇伝披露演奏会　十月五日㈰昼一時大阪東区森ノ宮中央一丁目森ノ宮ピロティホール、主催中山鳳水会。会員演奏十曲の外小川吟水、木村蓮水、水谷浩水、内田欽水、三輪花水、小西甫水、中野淀水各氏来賓出演、特別出演は東京一水会本部顧問宮原琿水氏が「敦盛」演奏。

○…京都琵琶協会十月例会　十月十日㈭午後二時本部平井会長宅。

○…第十七回琵琶コンクール　十月十二日㈰昼東京銀座ガスホール、主催日本琵琶楽協会。

○…筑前琵琶橘会全国大会　十月十二日㈰名古屋市中部電力ホール。

○…筑前琵琶旭会全国大会　十月十八、九両日福岡市少年文化会館。

○…錦心流琵琶演奏会　十月二十六日㈰正午大阪府立婦人会館、主催一水会大阪支部。

○…都派琵琶秋の公演　十月三十一日㈮夕五時東京日本橋第一証券ホール、主催錦穂後援会（有料）。会員の演奏九曲を始め会主都錦穂女史「敦盛」「伊那の曲」演奏。来賓出演は甲田勧水、都穂苑、平野鈬水、輝錦凌、座間鯉水、田中之雄、阿部秋子、杉山旗水各氏。

○…赤心流琵琶演奏会　十一月三日㈭昼静岡市城内婦人会館、主催赤心流鶴翁氏。会員の外東西の名手数氏出演。（次号詳報）。

○…琵琶と詩吟詩舞の会　十一月三日㈭西宮市夙川公民館松下ホール、蓮水会・一水会神戸支部（会長三浦蓮水女史）共催。会員の外東西の名手数氏出演。（次号詳報）。

○…錦心流一水会全国大会　十一月十五日㈯十時～二十時東京銀座ガスホール。

○…各流派琵琶演奏会　十一月二十四日（振替休日）正午京都東山安井金比羅宮会館、主催京都琵琶協会。（次号詳報）。

あとがき

気象台初まって以来という今年の多雨冷夏もどうにか終ったが九月に入っても残暑と称する日が無く知らぬ間に中秋を迎えた●各地演奏会などの報道記事が多い季節で、予定していた有益な寄稿が次号廻しとなり残念千万●高槻郵便局は人手不足とかで郵便物の配達が時には四日も五日も途切れて一つ時にドサッと持って来られるとどれから手をつければよいのかと本当に困る●京都、大阪のベッドタウン人口三十五万の中都市高槻がこれでよいのか、読者の方からのお返事など遅れて御迷惑をかけているのではあるまいか●気象極度に不順の折から愛読者諸賢にはひとしお健康に留意され専心ご自愛のほど心から祈り上げる。

昭和五十五年十月一日発行（非売品）
編集者　植村寞水
発行所　京絃社
〒569　高槻市津之江北町一一一ノ二三
電話〇七二六（七三）六〇五一番

諸に討死した者もあった。

これでは駄目だと足利は、家老の高師直（こうのもろなお）、師泰兄弟を大将とし、二十余ヶ国の大軍を河内に向わしめた。正行は吉野に参上し、師直兄弟と決戦する覚悟を奏上して、最後の拝謁を願い出た。

主上則ち南殿の御簾を高く捲かせて、玉顔殊に麗わしく諸卒を照臨あって正行を近く召し「以前両度の戦に勝つ事を得て敵軍に気を屈せしむ、叡慮先づ憤（いきどうり）を慰する條、累代の武功かえすがえすも神妙なり、大敵今勢いを尽くして向ふなれば、この度の合戦天下の安否たるべし。（中略）朕、汝を以て股肱とす、慎んで命を全うすべし」と仰せ出だされければ、正行首を地につけて兎角の勅答に及ばず、只是れ最後の参内なりと思ひ定めて退出す。正行、正時、（中略）この度の戦に一と足も引かず、一処にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇（後醍醐天皇）の御廟に参って、この度の軍（いくさ）難儀ならば討死仕るべき暇（いとま）を申して、如意輪堂の壁板に各々名字（みょうじ）を過去帳に書きつらねて、その奥に

返らじと　かねて思へば　梓弓
なき数にいる　名をぞ留どむる

と一首の歌を書きとどめ、（中略）その日吉野を打出でて敵陣へぞ向ひける。

やがて年革って正平三年正月五日、四條畷の戦に正行は賊の大軍を蹴破り蹴破って直ちに師直に迫り、師直も既に危い所を身代りに立つ家臣があって漸く逃げ去ることが出来た。正行は奮戦の後重傷を負い、弟正時らと共に自決した。正行亡きぁと吉野は最早安全ではなく、正月二十八日師直吉野に入って火を放った。行宮や蔵王堂の焼けたのはこの時である。

正行の戦死は二十三歳。父正成を大楠公、子の正行を小楠公と呼び、世の人々は敬慕してやまない。

我が道を行く
六十五年（七二）

西郷天風

琵琶慰問、南方従軍始末記

さて、昨年以来の老人病とは云え、無断休稿の段只々陳謝、お詫の言葉もない。

思えば、一疋狼を以て自ら任ずる私も寄る年波には勝てず、昨秋より左半身の不調を感じながら頑張るうち、本年に入ってとみにその度を増し、去る三月三日の夜半、突如呼吸困難となるや、我が人生もこれ迄かと眼を閉じた折り、主事医の一針が起死回生の慈光の如く輝き、日毎に加わる気力も夢の如く、九十歳の馬齢を重ねて、今や再びペンにしたしむ日を迎えるに至った。

ついては、久しぶりで京絃への稿を続けるに先立ち「琵琶の機関紙に他の記述は不心意」とのお叱りや、西郷天風なる琵琶師の存在を凝がう諸名士方に、吾が琵琶歴の一片鱗を披瀝して、以て琵琶師としての立場を表明する次第である。

顧れば明治生まれの私は、去る四月八日を以て満九十歳、現在四絃界に活躍中の諸先生や名人方とは、時代を異にすること半世紀にも及ぶべく、私が斯界への初デビュ！は、NHKがJOAKと称し居る時代で、而かも我国古有楽器による薩摩琵琶が、我が音楽界最高のブームにある時とあって、放送局では機を逸せず「琵琶名人位決定放送大会」と銘打って、名人三人選出を目標に堂々と発表すれば、全国から応募する者九百六十余名、当時鳳鳴会小石川支部満留（みつとめ）鳳南師の師範代だった私も、三百何番かの順で申し込んだものの、あまり多数の参加者にいささか気ぬけの感なきにあらずだったが、放送局でも何を感じてか「名人位決定」というのを、只の「全国放送大会」と改められ、当日は、北海道を皮切りに東北、関東、関西、九州の各地順に、知名社界人や音楽評論家等に審査を委嘱し、公開放送の結果、薩摩が西郷天風一名、筑前が大坪旭邦、池川旭窮の二女史の三名が当選した。

又レコード吹込みについては、その当時関西に鶴印と貝印の二社があり、そこから、常陸丸と城山の二枚を出して見れば、神戸の琵琶機関紙「正派月報社」の藤田俊雄氏から、歓迎琵琶大会を催したいからと突然の招請があり、折柄、山形県の庄内を廻って広島の白鳥ケ浜海軍クラブへ行く途上で、立ち寄って見れば、鹿児島から永井重輝名人を初め児玉天南、伊集院鶴城等々斯界の長老大家が集って、鹿児島本場然たる処へ演奏に乗込んだことは、終生忘れ得ぬ思い出の一つとなった。

ところでこの広島に宿泊中、林内閣の瓦解により、この天井村塾の運動も中止となり、一行と別れた私は台湾へ直行したのが昭和十二年四月八日の誕生日、七月には日支事変により中華民国に渡航、皇軍慰問もこれからが本格的となる折なれば、このまま仏印国境へと進む事にし、広島五師団の後を追い続ける私は、仏印国境に近い憲祥（ひょうしょう）という部落で追いつき、参謀部へ従軍挨拶に行き、鉄道隊宿舎の一室を与えられた。

随筆「方丈記」

作者。鴨長明（一一五三ー一二一六）八百年前

。父祖は代々京都賀茂神社の神官。

。和歌は源俊頼、琵琶は中原有安に学び名人であった。

。日野山の外山の庵室に移り、仏道を精進しながら、詩歌管絃に心を慰めていた。

日野山の閑居

（前略）

かたはらに、琴、琵琶おのおの一張をたつ。いはゆるをり琴、つぎ琵琶これなり。仮りの庵（いほり）のありやう、かくのごとし。

もし、桂の風、葉を鳴らす夕（ゆうべ）には、潯陽の江（え）を思ひやりて、源都督（げんとと く）のおこなひをならふ。若（もし）余興あれば、しばしば、松のひびきに秋風楽（しゅうふうらく）をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。芸はこれつたなけれども、人の耳をよろこばしめむとにはあらず、ひとりしらべ、ひとり詠じて、みづから情（こころ）をやしのふばかりなり。

（附記）

。日野山の庵室の内を抽写したところ略す。

。俗界をよそにして詩歌管絃に思を述べる堺界は長明の求め望んだものである。

。潯陽の江ー白楽天の「琵琶行」

。源都督ー太宰師源経信、琵琶の名手で桂流の租。

。秋風楽ー雅楽曲の一。

。流泉の曲ー琵琶の秘曲。

（鴨水記）

建礼門院と義経の最期

辻旭城

〝祇園精舎の鐘の声　諸行無常の響きあり
沙羅双樹の花の色　盛者必衰の理を顕わす
……。〟

平家物語に書かれた平家の末路は悲惨なものであった。

建礼門院徳子は、久寿二年（一一五五）平清盛の二女として生まれた。母は平時信の娘時子で、のちに二位の尼となった。

徳子は美貌にすぐれ、十七歳のとき後白河法皇の猶子に、公卿の斡旋で参内した。彼女は当時切っての名門であり、かつ才人でもあったところから、高倉天皇の女御となり翌年中宮となった。そして五年後には皇子を生んだ。三歳で即位し、八歳で壇の浦の海底に沈んだ安徳天皇である。平家一門は寿永四年（一一八五）三月二十四日、壇の浦で亡びた。

源義経の率いる源氏の軍勢に敗れた平家は、負傷して海中に飛び込む者や、斬り込まれてはかなく消えて行く将兵が多かった。なかでも悲壮をきわめたのは、幼帝と建礼門院、彼女の母二位の尼、いづれも海中に身を投げた。

そして安徳帝も尼もそのまま行方しれずに

なったが、建礼門院は波間にただよう緋の下着が源氏の目にとまり、長い毛髪が熊手にからめられて、源氏の舟に引き上げられ、直ちに医師の手によって応急手当が施こされて幸いに蘇生したので、衣食が与えられそのまま源氏の保護下におかれた。

平家を滅ぼした義経は、一躍凱旋将軍となって都に引き上げる船の中で、偶然にも捕えられている建礼門院と情を交わすに至った。江戸時代の春本「壇の浦夜の合戦記」には、その情景が精細に書かれているほか、「大衆の噂話」にもこのことが起草されている。

捕われの身となった建礼門院徳子は、義経の愛妾となって摂津や大和の国などで日を送っていたが、義経に反感を持つ家臣によって、鎌倉幕府の頼朝のもとに知らされ、ついに身の破滅をまねく一因となってしまった。

絶対の権力者平清盛を父に持ち、長じては天皇の生母になるという女性最高の地位にのぼりながら、戦いに敗れて死ぬことすらできなかった建礼門院の一生は、まことに目まぐるしくあわれで、後再び捕われの身となって京都へ送られたあと、髪をおろして世捨て人となり、大原の寂光院で平家一門の霊を弔いながら晩年を送った。

それから数年を経て都へ帰った義経は、二十数名の家臣とともに、有りし日の建礼門院のことも忘れて日を送っているうち、兄頼朝にうとまれるにいたった。

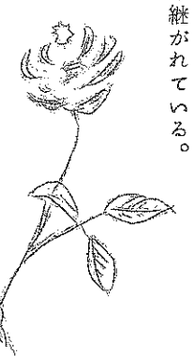
義経にしてみれば、一の谷、屋島、壇の浦での鮮やかな勝ちっぷりを褒められこそすれ、全く予期していなかっただけに意外でもあり、警戒心の種になったと思われる。また義経は、平家を破りはしたものの、安徳天皇を救うこともできず、三種の神器のうち、二位の尼とともに海中に沈んだ宝剣、八咫鏡をさがし出すこともできなかった。頼朝はこのことを義経の重大な責任と考えた。さらにこのたびの平家追討に先きだち、頼朝が河越太郎重頼の娘を義経の妻に世話しているにもかかわらず、事もあろうに敵方の平時忠の娘むこになったことである。

平大納言時忠は、平家一門が壇の浦に滅亡して敗軍の将となり義経に捕えられたが、三種の神器のうちの八咫鏡を護り、源氏に従ったので死刑をまぬがれた。それには時忠が娘の蕨姫を義経に差出し、正妻と別居するほど気に入られたことにもよるのだろう。

やがて時忠の流罪がきまり、主従十六人は舟で能登の片田舎に蟄居した。こうした義経の行為もまた頼朝の怒りを買ったと思われる。そして義経は、華やかな勝利の大将から一転して頼朝の追討を受ける身となり、やがて奥州へ落ちていく。

義経は、琵琶歌や歌舞伎などで知られる〝勧進帳〟の安宅の関を、富樫の仁情で乗り越えて平泉に向ったが、ここも安住の地ではなかった。頼朝から追討の命を受けた藤原泰衡は、文治五年（一一八九）四月三十日払暁、泰衡の率いる大軍が義経の高舘を襲った。義経は珠数を手にして持仏堂に入り、まづ妻と子を殺害してのち自害して果てた。

続いて義経の側近片岡八郎、伊勢三郎、常陸坊海尊、鈴木三郎、その弟亀井六郎、駿尾三郎、備前平四郎、増尾十郎ら何れも一騎当千の豪傑も防戦の上討死。また武蔵坊弁慶も衣川で、全身針ねずみのごとくに敵の矢を受けて壮烈な立ち往生をとげる。その勇猛凄絶な最期は日本国中の語り草となって、現在まで受け継がれている。



詩吟・和歌朗詠考（二）

編集部

（琵琶歌―白虎隊）

白虎隊　国歩艱難保塞を戍（まも）る　大軍突如風雨来たる　殺気惨澹（さんたん）白日暗し　鑿皷喧闐（へいけんてん）百雷震（ふる）う　巨砲連発僵死（きょうし）堆（うづたか）し　殊死（しゆし）陣を突いて怒髪（どはつ）立つ　縦横奮撃一面を開く　時に利あらず戦い且つ退く　身に瘡痍（そうい）を裹（つつ）んで口に薬を含む　腹背皆敵将（まさ）に何（いづ）くにか行かんとす　剣を杖ついて

間行丘岳（かんこうきゆうがく）を攀（よ）ず　南鶴城（みなみつるがじよう）を望めば砲煙飏（あが）る　痛哭涙を飲んで且つ彷徨（ほうこう）す　宗社亡びぬ我が事畢（おわ）る　十有六人屠腹（とふく）して僵（たお）る　俯仰（ふぎよう）す此（こと）に十有七年之を晝（が）にし之を文（ぶん）にして世間に伝う　忠烈赫々（かくかく）前日の如し　圧倒す田横麾下（でんおうきか）の賢（けん）。

（作者は会津藩士、明治四十一年十二月没、齢八十四。）

「註釈」会津戦争＝慶応四年（明治元年）正月会津藩主松平容保が将軍徳川慶喜と共に伏見の戦に敗れて江戸に還り、容保は幕府の快復を一念とした為め官軍は会津を攻め、激戦の末遂に容保は九月二十二日降参した。藩の子弟で組織した白虎隊は十七歳を頭に十六人の少年で、翌二十三日飯盛山で自刃した。国歩＝国運。保塞＝城。大軍＝官軍は九條道孝を将とした三千騎。鑿皷＝攻め太皷。喧闐＝やかましい。僵死＝倒れた屍。殊死＝必死。裹＝包む。宗社＝宗廟。田横＝漢の高祖が天下を握ったあと斉王の田横を召して臣とせんとしたが京まで来て自殺した。これを聞いた田横の家来五百人も殉死した。　下＝旗下。

（大意）戊辰の役に会津藩士中の青少年達が団結して白虎隊を組織した。今や会津は困難な場にのぞんで小城を死守したが官軍の大勢が突如烈風のように押し寄せ、激戦の惨澹たる有様に天日も暗くなった。攻め太皷は鳴り響き百雷震う如く、大砲は連発され死屍は地上に高く積まれた。必死の白虎隊は官軍の陣に突入して縦横無尽に奮戦し一方に活路を開いたが、時既に会津軍に勝算なく退却、白虎隊員は傷に繃帯し薬を口に含みながら周囲を見れば、腹背は官軍に囲まれて如何とも仕難い、剣を杖にして間道から飯盛山に登り、南の方鶴ケ城を望めば既に煙に包まれている。悲痛の涙を飲んで暫くは行きつ戻りつしたが、最早や国は亡び我々の仕事も終ったとして十六人（十九人とも云う）の少年は共に腹を屠って自刃した。想い起こせば十七年前のことだが、これが画となり文となって世間に伝わり其の忠烈は光り輝いて、つい先頃のように人の記憶に新たであり、この白虎隊こそ漢の田横の旗本の士よりも忠勇である。

（琵琶歌―城山）

西郷隆盛

孤軍奮闘囲（かこみ）を破って還（かえ）る　一百の里程絶壁（ぜっぺき）の間（かん）　我剣は既に摧（お）れ我馬は斃（たお）る　秋風骨を埋む故郷の山。

（作者は維新の功臣、西南の役で明治十年九月二十四日城山に於て戦死。齢五十一。明治十年二月一万五千の兵を率いて熊本城へ向ったが利なく僅か八ケ月の闘いであった。隆盛は鹿児島市の西北小山城山の背の凹地岩崎谷で戦死「南洲翁終焉之地」の碑がある。明治二十二年二月賊名を除き正三位に叙せられ、同三十五年嗣子寅太郎を華族に列して侯爵を賜った。）

（大意）援けの無い孤軍で奮闘し遂に官軍の囲みを破って鹿児島へ帰って来た。その間百里は絶壁の嶮しい道で苦戦をしたので剣は折れ馬は斃れた（苦戦の形容詞。）秋九月故郷城山に一党の骨は埋められよう。

悲報

阿部秋子

盛夏御見舞状をこのころ頂いているが、何んと涼しい気候で八月を迎えた事でしょう。まるで戻り梅雨の様相を感じます折柄、一人の琵琶愛好者を失って、残念やる方なくペンを取りました。

昨年初夏の京紘三〇二号に、感想と題して大阪浪速区の中條美治様の寄稿がありました。根っからの琵琶好き（と申しましても聴くだけ）とご自分も云っていられる。弾奏したこともない素人の方の感じた事、少しでも琵琶にたづさわる者として、それだけ真剣に聴いて下さることに私は感動いたしました。

この方、中條さまは、いつの頃からかよく覚えていないのですが、一般の来聴者で大阪

の演奏会で出会い「貴女の語りがハッキリ内容が判って聴きよかった。」と一言云われ、以来関西の会場で、よくお目にかかった方でした。

去る五月二十五日、京都琵琶協会の各流派合同演奏会にお招きを受けて出演させて頂きましたが、客席に中條さまのお顔を見ることが出来ませんでした。それから六月二十六日付けでお便りを頂戴しました。それによると、肺気腫で入院していますが殆んど治りました。又拝聴を楽しみにしているとの事でした。

それなのに七月十六日、容態急変して永眠された、いつも御招待状を頂いて有難うというお手紙が届きました。誠に悲しく、惜しい琵琶愛好者がまた一人消えてしまいました。哀しみ併せて中條さまの御冥福を心からお祈り申し上げます。（はづき五日）

柴田旭堂女史受賞

柴田旭堂女史は多年に亘り日本古典芸能筑前琵琶楽を以て市民の思想善導に寄与した功績により今回神戸市長から文化功労賞を授与されたが柴田女史個人の栄誉であるのは勿論、全琵琶界の為にも喜ぶべき事である。尚女史は去る一月旭会最高位の総師範に昇格された。

筑前琵琶演奏会

八月十七日(日)正午東京日本橋第一証券ホール、主催東京旭会（会長吉田旭明氏）。五絃段｜全会員▼坂崎出羽守｜福田旭盛▼那須与市｜藤内旭須美▼新撰組｜伴旭友▼大楠公｜大野旭翠▼天の羽衣｜橋上旭英、岡田旭蓮、松元旭川・絃旭盛、旭粧、旭須美▼唐人お吉｜内田旭章▼若き敦盛｜疋田旭絃▼北の庄｜藤巻旭彰▼茶道松風の曲｜大津旭紅・絃旭粧、旭英、旭蓮・琴野口旭麗・点前上原和仙社中▼大物の浦｜仲川旭朋・絃旭窈▼未練西行｜吉田旭明▼秋風故郷の山｜若宮旭登▼玉藻の前｜原島旭桂▼対王丸｜藤巻旭鴻▼石田三成｜押田旭窈。

京都『楽器祭り』に琵琶演奏

八月二十三日(土)京都四條高島屋七階催し場に於て主記が催され京都三美会（会長矢吹旭美津女史）が之に協賛して十一時と十三時の二回「千代の寿」「羽衣」の二曲を会長以下会員総出演して多数の観客を喜ばせた。

薩摩琵琶納涼演奏会

八月二十四日(日)昼一時浜松市東白連会館ホール、主催鶴絃会（会長小野鶴彦氏）。松の寿｜大場暁惺▼吉野山懐古｜九人・絃鶴泉▼宗良親王｜十一人・絃鶴伶▼母の教｜川口▼壇の浦を過ぐ｜小野▽城山の月｜九人・絃鶴浄▼花の白虎隊｜六人・絃鶴彦▼太田道灌｜竹原▼由井正雪｜桧木▼敦盛塚｜五人・絃鶴瑛▼四十七士｜六人・絃鶴苑▼寂光院｜三上鶴浄▼千手の前｜伊藤鶴麗▼菅公｜七人・絃鶴伶▼金州城｜小野ひろみ▼小敦盛｜染谷鶴泉▼桜井の駅｜大石鶴伶▼三万ケ原｜青島鶴瑛▼あゝ小野訓導｜会主小野鶴彦。

創立二十周年記念演奏大会

八月三十一日(日)昼十一時東京日本橋第一証券ホール、主催薩摩琵琶正絃会（会長西郷吉之助氏）。古典門琵琶合奏｜十二人▼小松の操(一)｜津和田岳聖▼小松の操(二)｜正木溪舟▼桜井の駅｜岩屋吟照▼本能寺｜新潟石田錦穂▼月華｜堀越素舟▼川中島｜佐藤湘春▼井伊大老｜樋口北舟▼項羽｜吉田央舟▼噫八月十五日｜伊集院牙城▼吉野落(一)｜本橋汕舟▼吉野落(二)｜清川嵐舟▼寂光院｜浜松三上鶴浄▼千手の前｜浜松伊藤鶴麗▼菅公｜八束一峰▼弾法｜辻靖剛▼巴の前｜仲川秀邦▼白虎隊｜久留米島津天嶺▼橘大隊長｜八戸最上穂洲▼二〇三高地｜京都平井春嶺▼噫小野訓導｜浜松小野鶴彦▼城山｜鹿児島田上精市▼錦の御旗｜軽部岳瑞▼弁の内侍｜岡部錦蝶▼彰義隊｜根本岳邦▼旅順開城(上)｜遠藤鶴東▼旅順開城(下)｜栗原雨竹▼潯陽江(上)｜須田誠舟▼湖水渡｜池野谷吟岫。

市民会館竣功祝賀会に琵琶演奏

八月三十一日(日)京都府城陽市民会館にて首記が催され京都三美会（会長矢吹旭美津女史）、大阪旭香会（会長菅旭香女史）協賛の元に筑

前琵琶「千代の寿」を両会長以下多数の会員演奏のほか琵琶、琴、三絃、尺八、笛、打楽器などの構成による「二ツの舞曲」が披露され絶讃を博した。

蓮水会・一水会神戸支部のゆかた会

八月三十一日(日)昼三浦蓮水女史宅。前夜来の豪雨も午前中に晴れ上がり、このほど区画整理のため近くに新築中の邸宅竣工披露を兼ねて蓮水会並びに一水会神戸支部会員を始め京阪神の同志を招待して催されたもので早速演奏に移り毋常盤｜高原柳水▼湖水乗切｜田中珠水▼静｜吉田秋水▼重衡｜木の宮梅水▼耳なし芳一｜滝沢花水▼小栗栖｜杭東詠水▼井伊大老｜小西甫水▼羽衣｜中野淀水▼お市の方｜楊嶽水▼吉野山懐古｜木庭旭山▼潯陽江｜小川吟水▼日蓮誕生｜三浦蓮水。以上の外京都中島旭穂女史の「月下の古城」以下十五題の詩吟も披露されたあと松野紫雲顕問や反町紫水氏も臨席、蓮水女史心づくしの料理で酒宴に移り芸談などに花を咲かせて和やかな雰囲気の裡に八時散会した。

第十八回近県親善錦心流琵琶演奏会

九月七日(日)正午秋田市大町協働社大町ビルホール、一水会秋田支部（支部長星野蓮水氏）、秋田琵琶連盟・秋田琵琶後援会共催、県芸術文化協会ほか後援。故松井灯水氏追悼を兼ねた催しで盛会であった。太田道灌｜芙水会員▽母の教｜佐藤▼秋海棠｜藤本▼ひめゆりの塔｜佐藤道水▼本能寺｜加藤快水▼重衡｜佐々木芙水▼井伊大老｜佐山練水▼広瀬中佐｜高井新水▼三成の最期｜船木濤水▼山科の別れ｜保坂遡水▼小栗栖｜新潟後藤学水▼羅生門｜横浜中谷美水▼川中島｜総伝披露・竹内信水▼湖水乗切｜鶴岡須藤玲水▼西郷隆盛｜総伝披露・星野巌水▼五條橋｜酒田荒井蛍水、荒井監水・絃山本笙水▼父乃木将軍（録音）｜故松井灯水▼（特別出演）屋島の誉｜一水会本部理事座間姣水▼茨木｜一水会本部会長中谷襄水。外に詩吟十題。

錦心流青年琵琶会

九月十二日(金)夕六時酒田市日吉町港座、一水会酒田支部・酒田琵琶愛好会共催、市教育委員会ほか後援（有料）。送別｜尾形▼月下の陣｜高見▼良寛｜中鉢貴水▼井伊大老｜阿部志水▼詩吟千島慕情｜吟二、尺八、ギター各一▼曽我｜旅河菖水▼新撰組｜池田青水▼石童丸｜山本周水▼舞踊花がたみ｜松島金寿▼木村重成｜佐藤智水▼本能寺｜ゲスト田中光水▼千曲川旅情｜斉藤姝水、上田宴水、池田青水、佐藤智水、山本周水・箏、尺八各一。

山崎旭萃と若き演奏家たちのコンサート

九月十六日(火)夕六時半大阪東区今橋大阪屋証券ホール、山崎旭萃を聴く会主催（有料）。羅生門｜上畑光啓・絃片山旭星▼日本楽器の為の四重奏曲｜尺八、第一箏、第二箏、十七絃各一▼茨木｜山崎旭萃▼鴨川の露｜島田旭紅▼地唄園の秋｜三絃、箏各一▼箏曲秋風の曲｜箏一▼曲垣平九郎｜山崎旭萃。

鶴翔会琵琶演奏会

九月十八日(木)夕五時半東京日本橋第一証券ホール、主催鶴翔会本部（会長鶴田錦史氏）（有料）。那須与市｜金井鶴朝▼大楠公｜藤内鶴孔▼経正｜広瀬桂穂▼竜の口｜荒川洲帆▼大高源吾｜木原綾子▼湖水乗切｜石坂鶴朋▼伊豆の御難｜都錦穂▼二〇三高地｜藤巻旭鴻▼西郷隆盛｜中谷襄水▼小栗栖｜友吉鶴心。

藤巻旭鴻演奏会

九月二十一日(日)十一時東京千代田区大手町農協ホール。旭鴻会主催（有料）（次号詳報）

邦楽琵琶まつり木原綾子演奏会

九月二十三日(休)十一時東京日本橋東京証券ホール、木原綾子女史主催。（次号詳報）

筑前琵琶大演奏会

九月二十八日(日)十一時神戸生田区相生町神戸市文化ホール、旭岡会主催（次号詳報）

東西合同薩摩琵琶一泊弾交会

九月二十八、九両日静岡県浜名湖畔弁天島浜名荘、四明会・正絃会・鶴絃会共催（次号詳報）